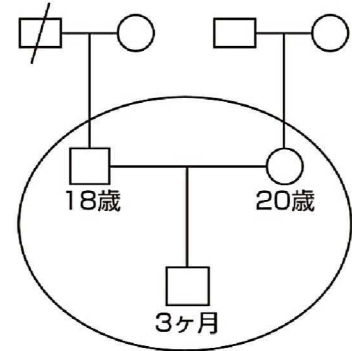


余裕が無くなった若い母親の育児

— 遺伝性疾患を持つ未熟児 —

未熟児養育医療の申請が有り、未熟児の家庭訪問に行った。

病院からは未熟児というほかにとくに連絡はなかった。訪問したら、あまりに体が柔らかいので、変だなと思った。母親は最初の子だから可愛がっていた。父親は収入は少ないが、友達が多くつい遊んで帰りが遅くなってしまう。経済的に苦しかったため母親はスナックに勤め始めた。



主治医が診断してない間は、こちらから何も言えないので。でも、何かはしておかないといけないという思いがあって、こどものね、筋力をつけるっていう名目で、理学療法士さんと一緒に月1回ぐらいかな、訪問して、リハビリ指導をね、したりして

て。それで、もうちょっと成長を見ながら、例えば、寝返りが遅いとか、お座りができないということが絶対出てくるだろうから、その時に療育相談につなごうかなという、最初はそういう感じ

で。保健師と理学療法士で月1回程度訪問を継続した。訪問して3ヶ月くらい経ったときに、子どもが別の部屋でずっと泣いていた。よく泣く子で、親もどうして良いかわからないから、「どんなしても泣くから向こうに置いてある」といっていた。保健師が抱っこしてあやすと少し泣き止んだので母親に渡したら、また泣き出した。母親が「泣かないで、泣かないで!」とバンバン叩いた。それを見て、余裕がなくなっているなど判断して、「誰か、育児、手伝う人いないの?」と聞いてみた。母親は実家があると話した。

次の訪問からは保健師1人で訪問して、母親の思いを聞いた。友人と飲みについて朝方帰ってくるとか、全く育児に関心がないなど父親への不満がいっぱい出てきた。お金が無くて、育児用品も全部母親の実家で買ってもらっていると話した。

やっぱりね、少しずつ発達の遅れが出てきていたので、彼女の中に、その不安もあったかなと思うんだけど。泣いて止まらないって。アパートの1室でね、自分と子どもだけっていうので、これはちょっと危ないかもしれないなという感じがして

て。「お母さんは、とにかくよく頑張っているよ、あんたは。なんかもう、スナックに勤めて、朝は5時にね、夫をね、弁当をつくって(仕事に)行かせて。これが理解できないのは若さだね」って、「夫はまだまだ遊びたいから仕方がないね」って。「でもでも、やっぱりね、これではいけないよね」とは言いつつ、でも、「ちょっとしばらくは、お家の力、借りようか」っていうのと。

母子通園施設が無料で利用できたので、保育士さんたちに保健師が疾患を疑っていること、母親の育児環境について事前に説明して、発達を促しながら絵本の読み方とか、遊び方とか、声かけの仕方を、保育士さんたちが見せてあげてほしいと依頼した。何よりも、今、母親が虐待するかもしれない可能性があるから、母親が安心して通える場所を作ってほしいと事前に相談しておいて、母親に母子通園施設を紹介した。保育体験には保健師も一緒に同行した。

決して、彼女にはできてないということは言わないでほしい。できてない部分たくさんあるんだけど、叩く時もね、あるんだけど、よく頑張ってると言ってほしいと。彼女がそうなるには、夫のやっぱりね、そういうあれがあるから、ここ（通園施設）に吐き出せる場所をつくってほしいという話をして。でも、保育士さんにすごいやり手の人がいっぱいいて、年月の長い人たちがいっぱいいて、そういうのができる人たちだったので。

母子通園施設に通っているうちに母親の方から「（発達が）遅いんじゃない？」という言葉が出始めたので発達センターを紹介した。児は遺伝性の筋肉疾患で、母親も高校の頃から症状が出ていたこと、母親の実母も同様の症状があることがわかった。発達センターの保育士さんたちが母親の話を「そうね、そうね」と聞いてくれて、母親が受容されるっていう体験をしたことで、初めて、保育士さんたちに父親（夫）のこと、こどもの不安についても本音話せるようになった。保育士さんに、「もし通院施設に通ってなかったら、自分は虐待していたと思う」と母親が自分から話せるようになったというのを聞いて、保健師はもう大丈夫と感じた。

未熟児の場合、ちょっとでも引っかかって、1カ所でも気になる時は、その気になるところが解決できるまでは訪問し続けますよ。その中で、お母さんには言わないけど、自分（保健師）の中でホッと（大丈夫と確認できる）する部分が出てくると、「ああ、ちょっと見過ぎてたんだね」とか思いながら。何やかんや理由をつけて、やっぱり。「未熟児は毎月訪問するんですよ」って毎月訪問しますし。だから、「来月は〇日ね」とか言って、もう当たり前のような顔して。母子手帳に毎月書くところがあるから毎月書いてっていう感じで。

母親も実家の協力を得て、昼間パートに出るようになった。保健所の近くまで来たら子どもを「見て」と保健師に見せに来る。予防接種もきちんと受けるようになった。来所時は母親が育児等よく頑張っていることを評価し、母親の自尊心を高めることに努めた。保健師は、母子通園施設、小児発達センターにもつながったことや母親が成長したと判断し、積極的な支援は終了した。約2年の支援であった。

感想：気になったことがあるケースには、それが解決するまでかわるという基本姿勢を実行している保健師の支援内容であった。母子手帳の記載の活用方法や保育士さんたちにケースを紹介する時の事前の打ち合わせの留意点など若い保健師が学べる技術が詰まっている事例であった。

（小笹）